

# 木製小塔の製作残材

—百万塔製作工房の在処<sup>ありか</sup>について—

1985年に刊行された『木器集成図録 近畿古代編』（奈文研編）で「栓」と分類されたものの中に、図39に示すような形状をした数点の木製品がある。これらは「割材を円柱状に加工し、一端の木口面を轆轤挽きし、中心に乳頭状の突起をつくる。栓の一種に想定している。しかし、轆轤挽きが下部におよんでいないところから、轆轤挽で生じた屑の可能性もある。」との説明が加えられている。上記『図録』には平城宮出土の4点(3～6)のほかに、長岡京からの出土例1点(8)が図示されている。その後の調査で、平城宮では3例の出土例が加わっているが、今のところ、平城京域からの出土例はない。

平城宮出土の7点は(7)以外は広葉樹材で、樹種の明らかなものは、(3)と(6)がサカキ、(4)がサクラ材、(7)は年輪のきわめて緻密なヒノキである。円柱部の最大直径は(1)、(5)が3.9cm、(3)、(4)、(6)が4.0cm、(2)がやや大きくて4.2cm、(7)は4.5cmある。これらが器物の栓であるとすると、断面形が整った円形ではないので、器物の口の内面と密着させがたいことに加えて、密閉するという機能とは無関係の上面に限り轆轤で仕上げている点が不自然であるし、円柱部の側面にも栓として使用された痕跡は認めがたい。したがって、この一群の円柱状木製品は轆轤加工の残材であると判断される。

それでは、何を製作した際に生じた残材であるのか。あるいは未知の製品の存在を想定すべきかもしれないが、今、私は木製小塔、すなわち平城宮での出土例としてより限定するならば、百万塔と称されている三重小塔を作った際に生じた残材である可能性があるともみている。百万塔に関しては、近年『法隆寺昭和資財帳』編纂事業に際して、奈文研が中心となってすすめた、法隆寺に伝世されている数万点の百万塔についての調査研究があり、百万塔そのものについての様々な重要な知見にとどまらず、奈良時代における官営工房のありかたに関しても多くの注目すべき成果が得られている。

金子裕之<sup>1)</sup>、松村恵司<sup>2)</sup>の説明にしたがって、百万塔の構造を述べると、塔身部と相輪部を別々に轆轤でつくり、塔身部の頂上をくりぬいた円孔に上から相輪をはめこんでいる。塔身部は、基壇と三層の屋根(笠)からなり、相

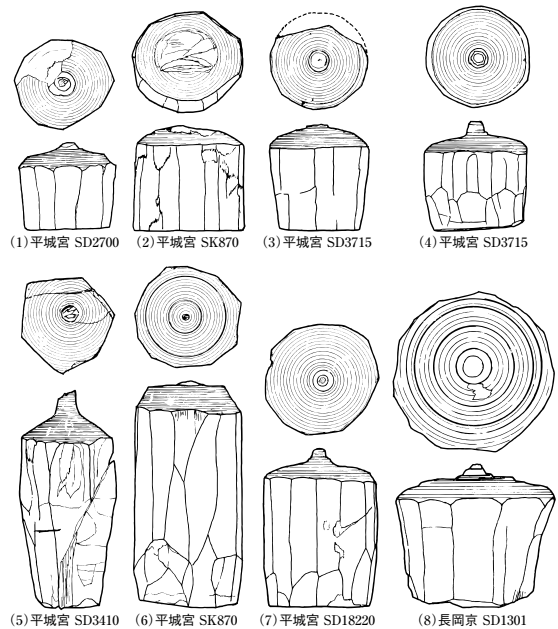


図39 円柱状轆轤残材 1:3

輪部は下から露盤、伏鉢、請花を小さく表現した九輪の上に、大、小の請花を表現し、頂部に宝珠を表現している。使用材は、塔身のほとんどがヒノキであるのに対して、細かな加工が必要な相輪部は（限られた鑑定例では）サクラやサカキ、センダンなどの広葉樹が用いられ、心持材を避けて、大径木の辺材を利用して製作されている。

さて、件の円柱状残材は前記のように、1例以外はサカキ、サクラ材などの広葉樹材であり、しかもいずれも心去り材を使用している。法隆寺百万塔の相輪部の計測データによると、相輪の最大径を表す最も大きな請花の直径は3.02～3.88cmの間にあり、計測した391点の平均値は3.51cmである<sup>3)</sup>。平城宮出土の7点の残材の最大径は3.9cmから4.5cmの間にあり、轆轤旋削の削損を考慮すると、相輪部の用材の大きさとしてふさわしい。

相輪部を轆轤旋削で製作する場合、周側面を縦方向に細かく削った円柱状の棒材の一端を轆轤駆動側に、おそらく嵌め型方式で固定し、研削を施す。相輪先端の宝珠の頂部は細く尖った形態をとるが、法隆寺百万塔の遺例中、表面の胡粉の剥

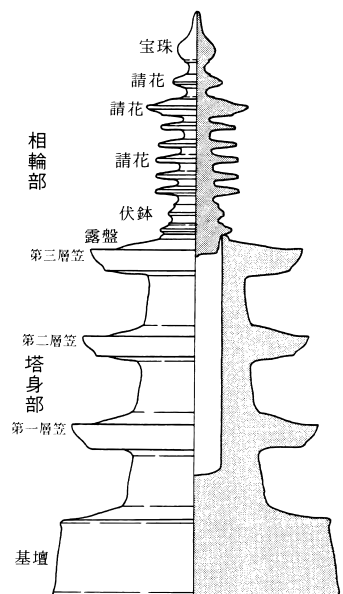


図40 百万塔各部の名称 1:3

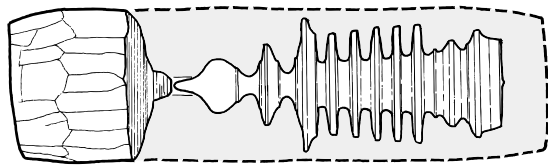


図41 相輪部の轆轤旋削用材 1:2

落したものでは、この部分を轆轤旋削ではなく、手持ちの削りで仕上げた形跡が残る。いっぽう円柱状轆轤残材の上面、つまり轆轤旋削面の中心部に残された臍状の突起をよくみると、3mmほどの太さまで轆轤で削り込んで、その後に本体（製品）から切り取り、あるいは折り取った痕跡が残る（図41）。百万塔の実作による知見では、宝珠先端部分はきわめて繊細なので、轆轤旋削で最後まで仕上げることは現実的ではなく、やや太めの円柱状に旋削したのち切り取り、小がたなで先細りに仕上げるといふ。遺例にみる宝珠先端の先細り部の基部の直径が3mm前後であることから、円柱状轆轤残材が百万塔相輪部の製作に際して生じた木屑である可能性は高いと考える。

これまでに、平城宮内からは、百万塔の塔身部の完形に近い未製品Aが中央区朝堂院区画西方の基幹排水路SD3825から1点、同じく塔身部の笠の縁辺部の小破片Bが内裏東側の基幹排水路SD2700から1点出土している。Aが出土したことにより、百万塔の製作工房が平城宮の内部に存在したことが推定されており、いっぽう、Bの存在は、百万塔が十大寺だけではなく、平城宮内にも安置されていたことを示すものと理解されている<sup>3)</sup>。しかし、興味深いことに、Bが出土した同じ溝SD2700からも残材(1)が出土しており、またAの出土地点から西11mにある溝SD18220からも(7)が出土している。つまり、円柱状轆轤残材が百万塔製作に直接関わるものとの

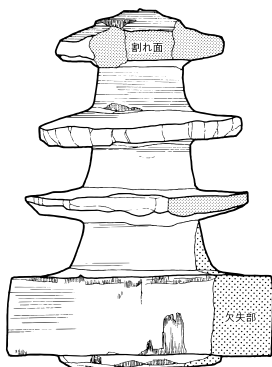


図42 百万塔の未製品A 1:3

上述の私見が妥当であるならば、Bは宮内に安置していた百万塔の残欠とみる必要は必ずしもなく、製作時に作り損じた破片であるともみられる。

また残材(3)、(4)は中央区朝堂院区画のすぐ東の基幹排水路SD3715から出土したもので、埋没した時期は層位からすると奈良時代

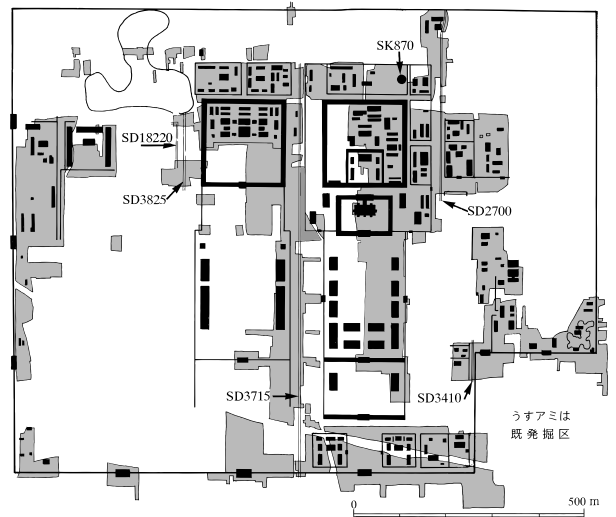


図43 平城宮（奈良時代後半）

後半期である。(2)、(6)は内裏北方官衙内の土坑SK870に投棄されていたもので、この土坑からは、ほかにも轆轤で挽き残した木屑が数点集中して出土しており、この近辺に「ロクロびきの工房の存在」が想定されている<sup>4)</sup>。SK870出土の土器群は平城宮V段階であり、780年を中心とした時期のものとされている。百万塔の完成年次である宝亀元年(770)と、さほどの隔たりはない。さらに(5)は平城宮東院の西南隅の的門(小子部門)の西を南北に流れる溝SD3410から出土したものであり、出土例がいまだ稀少とはいえ、この種の残材の出土地点は平城宮内の各所に及んでいることがわかる。

百万塔の製作工房あるいは生産体制については、百万塔に書かれた墨書の分析などを通じて追究が進められているが、金子裕之によると、工房としては工人、工夫合わせて500人がいた勘定になり、造東大寺司にも匹敵する規模とも考えられている<sup>3)</sup>。このような規模の生産体制を実現させ、かつ短時日のうちに百万基という大量の製作を可能にするには、数少ない製作施設では対応しきれなかったことは想像にかたくない。つまり、百万塔に関わる未製品や残材の出土状況から推測すると、SK870に示されるように、既存の官衙施設の援用を含めて、平城宮内の多くの場所に製作場所を設定し、造小塔事業を遂行したと考えることができよう。(井上和人)

- 1) 金子裕之「百万塔」(『法隆寺の至宝5-昭和資財帳-』1991)
  - 2) 松村恵司「百万塔調査の成果と課題」(『伊珂留我 法隆寺昭和資財帳調査概報⑧』1988)
  - 3) 金子裕之「百万塔の工房」(『官営工房研究会会報1』1994)
  - 4) 町田章「木製品」(『平城報告Ⅶ』1976)
- \* 樹種に関しては光谷拓実氏の教示を得た。  
 \* 百万塔の実作に関するさまざまな知見は大和郡山市杉野清隆氏の豊富な経験に基づくところが大きい。